



TITLE:

京都天文學會天文學談話會記事

AUTHOR(S):

CITATION:

京都天文學會天文學談話會記事. 天界 1930, 10(114): 355-358

ISSUE DATE:

1930-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161574>

RIGHT:

京 都 天 文 學 會

天 文 學 談 話 會 記 事

◇第五回◇ 六月三日午後四時より 天文學教室に於て。

座長 竹田助教授

Y. C. Chang: A study of the orientation of the orbital planes of 16 visual binaries having determinate inclinations (紹介者山村)

リック天文臺等の観測で新に得た四つの軌道面の向きの決つた二重星を加へて、全部で16個の二重星を用ひて、軌道面の極の分布をしらべたが、之迄大體認められてゐたやうに、局部的に偏つてゐない事が確かめられた。

E. A. Milne: The structure and opacity of stellar atmosphere (續き)

中村要氏 Schwassmann-Wachmann 彗星 (1930 d) の観測報告。

漸く視界を遠ざかつて、一時天界を賑はしたこの彗星の観測も終つた。中村氏に依ると、極大光度の時には彗星は肉眼で見えたそうで、六等以上になつた譯である。ウインネツケ彗星以來の珍客であつた。

次回は六月十日花山天文臺で開く豫定であつたのを、天文臺の都合で延期する事となつて六月十七日第六回を開く。

◇第六回◇ 六月十七日午後四時より 花山天文台に於て

座長 山本教授 司會

當教室の新進氣鋭の上島講師の研究發表がある。

上島講師 Stellar atmosphere の opacity に就て

ミルンの所謂“Maximum method”をファウラー著“Statistical Mechanics”中の二十個ばかりの星のスペクトル線の maximum に應用して

Stellar Opacity の式 $\kappa = \alpha \frac{P}{T^{\frac{3}{2}}}$ 中の常數を計算して見たが必

ずしもミルンの値と一致しないらしい。

Gerasimovic: On the classification of variable stars (紹介者 渡邊)

近時變光星研究の上に重大な意味をもつ分類法に對する一提案である。この複雑極まる分類はその外廓を示すのさへ容易でない。渡邊氏は平易に之を説明せられる。

◇第七回◇ 六月廿四日午後四時より 天文學教室に於て

座長 竹田助教授 司會

山村清氏：On the motion of Rhea.

ストルーベ及ウォルチエ兩氏の研究によつて“レア”の Perisaturn の經度が土星の最大衛星“タイタン”のそのの周りに秤動する事が理論的並に觀測的に確められた。この事實は後に東大の荻原博士によつて一層精確に確定せられた。1930年の佛曆が“レア”の要素 $\bar{\omega}$ (longitude of peri-Saturn) に對して依然として H. ストルーへの値を記載してゐる事を注意す。

能田忠亮氏 「甘石星經考」

史記天官書總論に「古の天數を傳ふる者、齊に在つては甘公、魏は石申」徐廣注に「甘公名は德、本是れ魯人なり」とあり。劉向の七録には「甘公は楚人なり、戰國の時、天文星占八卷を作る。石申は魏人、戰國の時天文八卷を作る」とあり。思ふに戰國の世に甘公、石申なる二人あり。頗る天文に通じ五星を觀測して占候、五行説の基礎を開き歲星紀年法を用ひると同時に多くの恒星を觀測してその名稱を定めその位置を測定した事は殆んど疑を容れない。されば支那戰國時代に於ける天文の狀勢を察知するには、甘石星經の研究に俟たなくてはならぬ。然るに不幸にして甘石の事蹟甚だ明かならず、僅かに漢魏叢書中に甘石星經と稱するものあれど漢の甘公石申著となれる爲めか後世の僞作として深く顧みられなかつたのである。而も之を瞥見するに卷頭先づ「原缺文一張」とあり北極星の記事及び西方南方の宿は之を缺き完全なものではない。一部分は明かに失はれたものの様である。元來は五星の記事もあつたもので今日では見られないが宋の時代までは存在しておつたのである。(文獻通考第219卷)

加之吾人が要求するが如き天文記事は比較的乏しく研究材料としては頗る貧弱なるものの如く思はれたのであるが私かに期するところありて、之が研究に着手したのである。乃ち先づ三種の漢魏叢書並に五朝小説、說郛等に見えたる甘石星經の本文について比較研究をなし、之らの材料は何れも同じオリジンのものであることを確かめ、次に甘石星經に見えたる星座數162、星數大約770餘につきて研究したるに、殆んどすべて甘公石申巫咸なる三家の星に歸着し得、不明のもの僅かに5座、星數30、之によつて甘石星經の中には巫咸の星も包含されてゐる事を明かにし得た。次には去北辰度數(North polar distance)よりその觀測年代を算定するに、その標準にとりたる距星の照合をやらなくてはならぬ。それには

徐發： 天元曆理

Schevalier 土橋八千太： Catalogue d'Etoiles

Gustave Schlegel： Uranographie chinoise

戴進賢： 欽定儀象考成

その他欽定天文正義等に照らして記事に 忠實に距星の照合を行つたのである。一度距星の正體がわかればその去北辰度數よりその觀測年代を算出する事が出来る。即ち計算によれば二、三の例外を除けば殆んど凡ての星は戰國中期(一360年頃)の觀測となる。之に依つて此の甘石星經の記事は少くとも戰國中期或は周末の大占星家の un écho de la tradition と見て差し支へない。(敢て著作年代を戰國中期とは云はぬ)。他の方面よりいへば陳卓のそれと頗る似通つてゐるので 晉の時代のものかとも考へられ陳卓の集錄それ自身は甘公石申巫咸の著作に基いてゐると云ひ得るとすれば此の甘石星經は晉以前にあつたかも知れぬ。とまれ何んなに時代を引き下けても唐以後ではあり得ない。何となれば唐時代の記載には屢甘石星經が引用されてゐるからである。

此の研究の主眼點は勿論甘石星經の著作年代にあるが如くに 思はれるであらうが筆者は飽くまでも支那戰國時代の 天文の狀勢を察知するに力點をおいたのである。語りて詳ならざるは之を後日に須つあらん事を、今は唯その概略にとどめる。

◇第八回◇ 七月一日午後四時より 花山天文台に於て

座長 山本教授 司會

中村要氏 : Schwassmann-Wschmann 彗星に屬する流星群に就て

逸早く京都大學より全世界にその出現を報ぜられたシワスマン彗星に附屬せる流星は花山天文臺員總出で觀測された。既に5月21日に之に屬すると覺しき流星群が出現した。中村氏によると流星はすべて弱光度で、4等乃至それ以下であつた。

山本教授は宮澤氏の觀測を報ぜられたが、甚しき時は1時間に100の多き割合に上つてゐる由である。

中村要氏 : 11糎の寫眞玉

望遠鏡の權威中村氏の努力になつた十一糎の寫眞玉を見せて戴く。

上島昇氏 : On the Uniformity of the composition of stellar atmosphere

ミルンの“Generalized Saha formula”とラツセルの“Rowland intensity scale”とを組合して太陽, α Ori, α Sco, α Boo, γ Cyg α Per, α Can mi, 2 Can. ma の八個の星の大氣中の種々の原素の定量分析をして見た。それによると、どの星の大氣の組成も大差ないらしい。

花 山 だ よ り

九月に入つて、休暇歸省中の人々も歸山せられ、それに新しい人の顔も二三増して、相變らず賑やかです。高城氏は志願助手より正式のメンバーとなられ、又、宮井君が時計係の雇員として來られました。夏期中滞在せられた人々のうち、最後の金森氏は九月四日下山されましたが、西女史のみは、夏を過ぎても、引きつゞき天文臺で研究をせられることになりました。

四十六糎が愈々完成しました極軸にローラーが付け加へられたので、運動は輕過ぎるほど輕くなり、接眼部には大規模な寫眞撮影裝置が施され、又、そこには獨特新案の單式移動取枠が付けられたので、もはや此の上の慾はありません。すぐ、エロスと超海王星と、微光の小遊星と彗星との觀測が始められませう。又、いよいよ日本製の星雲寫眞が撮れることになつたわけです。柴田君の25センチ F3 鏡も程なく完成する豫定です。